



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光地を生きる人々：中国・貴州省西江（シ・ジャン）ミャオ寨の観光人類学的研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	セン, 麗珊
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16486号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94946
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Lishan_Xian_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 冨 麗 珊

審査委員	主査	教授	小 田 博 志	
	副査	教授	山 口 未 花 子	
	副査	准教授	伍 嘉 誠	
	副査	准教授	天 田 顕 徳	

（メディア・コミュニケーション研究院）

学位論文題名

観光地を生きる人々—中国・貴州省西江（シ・ジャン）ミャオ寨の観光人類学的研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

観光人類学の領域に位置づけられる本論文の成果は、次の5点から評価される。

まず観光地における綿密なフィールドワークを通して得られた知見を生き活きと描き出しつつ、単なる記述に留まらず、そこに理論的な意義のある事例を発見し、それを的確に分析できていること。これによって本論文には貴州省西江ミャオ寨の現在に関する資料的価値があるのみならず、理論的な意義も認められる。

第2に、観光人類学がこれまで前提としてきた「ホスト／ゲスト」の非対称的な関係性を問い直し、等閑視されるきらいのあったホスト社会の側のエージェンシーを明らかにしたこと。例えば、一見力が強いと思われる外来経営者に対して、地元民は親族関係を維持しながら自分たちにとって都合のよい雇用関係を実現しているということが調査を通して明らかになった。

第3に、ホスト社会が有する互酬的な社会関係に着目してこれを経済人類学的に敷衍し、観光人類学と理論的に接合していること。これは市場経済的な観光化と伝統的な互酬的社会関係とのハイブリッドな関係性を論じる斬新な視点といえる。特にこれは二重価格の分析に顕著で、従来の解釈とは異なる二重価格のメカニズムを指摘している。つまり、食堂の経営者とその客となる地元民との互酬関係が地元民を優遇する価格として表され、さらに地元民の食堂の選択を観光客が参考にすることで、今度は地元民からの「返礼」が食堂経営者に還元されることになる。このように二重価格という事象を読み解くことで、地域社会から「離床した」市場経済と地域社会に「埋め込まれた」互酬関係とが入り組んで成立する構造を明らかにし得ている。

第4に、観光資源とされるステレオタイプ化された文化と、その舞台裏で営まれる日常的な文化の差異を指摘し、後者の日常文化もまた観光化された社会を住民が生きる上で重要な役割を有していることを浮き彫りにしている点。

そして第5に、グローバルな規模で観光化が進む現代において、その弊害の歯止めとなり、持続可能な観光開発のヒントとなるような応用的意義を示していること。例えば、本研究で明らかになったホスト社会の側のエージェンシーを適切に踏まえることによって、地域住民の生活とバランスの取れた観光開発をデザインすることができるであろう。

・学位授与に関する委員会の所見

以上のように顕著な学術的意義を有する本論文であるが、口頭試問の間では以下の問題点が指摘された。

・観光開発における権力関係ということをするとき、それはホスト／ゲストのみならず、国家や地元政府、また開発業者などのステークホルダーの存在や、マジョリティとマイノリティの民族間の非対称性も関与していることが想定でき、それらのマクロな政治経済的コンテクストをどう分析に含めるのか。

・研究者の脱観光客化のプロセスや地元民のエージェンシーに関し、参照されるべき文化人類学および関連分野の先行研究があるのではないか。

・さらに例えば「消費」というときに、それは現地でいわれていることなのか、それとも筆者の解釈なのかが判然となるような注意深い記述をして、研究者の側の概念枠組みに収まらない現地の複雑なリアリティをより繊細かつボトムアップに理論化する工夫の余地もあるのではないか。

以上のような指摘に対して、筆者からはこれらの問題点を十分に自覚しており、それを今後の研究において改善していく計画である旨の応答があった。

これらの課題はあるものの、本論文で立てられた研究設問には十分な答えが導かれており、その成果の学術的な意義は確かなものであると認められるので、審査委員会では一致して本論文が博士（文学）を授与するにふさわしいとの結論にいたった。